

井上順孝著『教派神道の形成』

弘文堂、1991年、401+xxi頁、7900円

藤 井 健 志

1

教派神道に関する従来の研究史を整理した上で新しく分析概念としての「教派神道」という概念を提示し、さらにそれを近・現代日本宗教史上に積極的に位置付けた点で（第一章～第三章、第八章）、本書は近代日本宗教史研究の中で、今後重要な役割をはたすものとなるであろう。同時に教派神道四教団に関する詳細な記述（第四章～第七章）は研究資料としても有効なものとなるであろう。しかしまた、ここで示されている「宗教システム」という概念（序説）は、「近代」の「日本」の宗教の分析に限らず、広く様々な時代の様々な文化における宗教の分析にも用いることのできる概念であり、その意味で本書を近代日本宗教史研究という狭い分野における成果と限定して考えることは妥当ではない。宗教史研究の諸領域においても本書は今後、重要なものとなるであろう。さらに本書で論じられているグローバル化の問題（第八章第二節）は、一方では宗教の現代的状況に対する解釈の枠組みを示すとともに、一方では世界宗教と民族宗教という宗教学の古典的な対比があまり有効な研究視点ではなくなってきた現代において、新しい理論的枠組みを示唆しており、宗教学の理論的側面にも一石を投じたといつてよいであろう。

したがって本書は様々な観点から評することが可能なのだが、ここでは私の関心に従って次の二点に触れてみたい。第一は同時代の仏教との対比について、第二は「宗教」という概念について、である。もっとも本書は随所でいろいろな限定を設けて記述を厳密にしようとしている（第八章第二節のグローバル化に関する記述はやや例外というべきか）ので、その批判は容易なことではない。また私はある書評会において著者の井上氏にここで示した問題についての回答を直接得ており、その際に本書成立の裏話とも言うべきものを少し聞くことができた。したがってここで同じ問題を再論するのは妥当ではないかもしれない。ただ私は本書とはほぼ同じ時代の仏教に関する研究に若干かかわったことのある者として、著者とは少し異なる視点から教派神道を眺めることができる。ここではその視点を示しながら、本書から予見することのできる近代日本宗教史研究の課題について述べることにしたい。

2

本書は幕末・維新期の宗教的状况についてかなり詳しく論じているが、当時、神道とと

もに同じ課題に直面していた仏教についてはほとんど論じていない。このことについて井上氏は前述の書評会において、仏教の重要性については十分認識しているが、さしあたって議論を神道に限定する旨の発言をしている。仏教に言及するとしたら、本書で教派神道に対して行なったような詳細な研究を仏教に対しても加えなければならないからである。したがってわれわれは本書が仏教に論及していないこと自体を批判することはできない。

しかし本書は意図的に仏教に関する記述を避けて、神道に関する記述にしぼったために、結果的に神道と仏教との差異を強調しすぎているような印象を与えることになったと思う。また井上氏がわずかに仏教について触れている箇所（たとえば p.4）から同氏が神道と仏教とがかなり異なった宗教システムであると捉えていることがわかる。だが、幕末・維新时期という日本宗教史上の大変動期の研究において、当時の宗教状況を捉える場合、神道と仏教との違いを自明の前提として両者を対立的に捉えすぎること（井上氏が必ずしもそうした態度をとっているわけではないけれど）問題だと思う。

このことについてまず最初に幕末における皇国思想の問題をみてみよう。本書に示されているように幕末の日本においては民族的アイデンティティが模索されたのであるが、そのときに「日本は神国である」といった神道的装いをもった皇国思想が神道家に限らず、広く一つの前提として存在していた。したがって仏教者が仏教の立場から「護国論」を論ずるときにも、こうした皇国思想自体には疑いをさしはさまず、それを前提として議論を展開したのである（有名なものでは浄土真宗の僧侶、月性の「仏法護国論」）。この点において仏教者は神道家と基本的には同じ姿勢をもっていたのである。だから神国の観念を神道固有のものとして理解することはできないし、皇国思想の担い手を国学者や神道家に限定することもできない。むしろ皇国思想に基づいて日本を理解する考え方は、当時日本人が民族的アイデンティティを模索する際の基本的形式であったと思う。したがってこの時期の神道家の皇国思想を単純に神道思想と置き換えるわけにはいかない。仏教者からみた場合、神道の神観や儀礼は受け入れがたいものであったが、皇国思想はむしろ自明に近いものであったからである。言い換えれば神道思想に比べて皇国思想は当時においてはより包括的なものであり、いわば両者の間には一つのズレがあったのである。

このように皇国思想を広く想定してみると、神道と仏教との区別は必ずしも明確なものではなくなる。たとえば幕末において、皇国思想を一つの拠り所として民族的アイデンティティを模索する、という時代の課題の担い方という点では、井上氏が言うところの「教派神道」と「神道的新宗教」との差よりも、「教派神道」の神道家と様々な著作を残した仏教僧侶との差の方が小さいのではなからうか。両者は「ある程度の知識人」（p.117）ということで時代への対応の仕方がよく似ているのである。つまり同じ神道的伝統に属する二つの運動の共通性よりも、一部の神道家と一部の仏教者との間の共通性の方が、はる

かに大きいものであった。

このことは第一に、教派神道と既成仏教宗派、あるいは神道系新宗教と仏教系新宗教との間に宗教システムの類似性が見出されることを意味する（このことは井上氏も p.132 注(7)で触れている）。今後、この点からも幕末・維新期の宗教状況を検討することが必要になるであろう。また第二に、同じ皇国思想を受け入れながら、近代に入ると神道と仏教とはかなり異なる形でそれに対処していくことになる。そこで仏教者がたとえば真俗二諦論という形で皇国思想と仏教思想とを関連づけたように、神道家が皇国思想と神道思想とのズレをどのように処理していったか、という観点から神道思想を捉え直す必要があると思う。仏教そのものを必ずしも研究対象としなくても、仏教を意識的に視野に入れることによって神道思想の把握を深めることも必要となってくるであろう。

神道と仏教との共通点に関してもうひとつ論じたいのは、「宣教型の教団宗教」についてである。井上氏は江戸時代において、すでに仏教が宣教型の教団宗教の伝統をもっていたとし、その点に神道との違いをみている（p.4）。しかし確かに中世の仏教は宣教型の性格をもっていたのだが、近世仏教は寺檀制度によって宣教型の性格をかなり失っていた。近世の仏教は共同体に合致した宗教として、その地域の神社と同じように、民衆に浸透している。したがって説教による教化（檀家の人々にその宗派の伝統を確認させる）は行なわれていたが、寺檀制度を越えた布教は行なわれていない。近代に入って教派神道は確かに神道の伝統の中から宣教型の教団へ移行しようとして様々な困難に直面したのだが、仏教的伝統の中においても、寺檀制度から脱皮しようとした多くの仏教運動が挫折を繰り返している（たとえば清沢満之の精神主義運動、あるいは大日本仏教済世軍）。

とすれば、教派神道の抱えていた問題は、宣教型の宗教を経験したことの無い神道の、宣教型宗教への展開という神道固有の問題でもあるとともに、共同体と密着した近世型の宗教が、近代的な宣教型の宗教へと展開していくという、神道・仏教に共通したより大きな過程の一環として捉えることも可能であるし、そうした視点からの研究も今後必要となってくるであろう。

3

次にわれわれは、近代以前においては「宗教」というカテゴリー自体がはなはだあいまいなものであったことを考えてみる必要がある。繰り返しになるが、幕末において日本の将来を考えようとする者は、「神国」という問題や、キリスト教の問題について考えざるをえなかった。ナショナリズムと宗教思想との境界があいまいで、政治について語ることが、容易に宗教について語ることに転換した時代である。妙な言い方だが、本来、宗教に関心をもたない者も、宗教について語っていたのである。つまり「宗教」という政治や道德の問題から独立した次元がまだ成立していなかった。むしろ宗教が独自の領域をもつものと

して認識されるようになったことが、近代そのものの特徴であると言えよう。とすれば教派神道が展開する場を「近代国家の宗教的次元での自己規定」(p.2)と考えることは、宗教的次元の存在を自明の前提としており、現代のわれわれの念頭にある「宗教」という概念を前提にしすぎているような気がする。こうした観点から捉えることの有効性は否定しないが、教派神道の展開する場が、むしろ宗教的次元そのものの形成されてくる場であったと考えることもできるであろう。

こうした角度から考えると、教派神道について研究する際に、さらにもう一つの問題を考えなければならなくなると思う。現在われわれが「宗教」としてイメージするような思想的伝統が、当時は「宗教」的なものとは考えられていなかったかもしれない、という可能性である。

これに関しては「ネオ・シンクレチズム」(第八章)を問題にすることができる。「神道ファンダメンタリズム」をめざす神道家が比較的容易に儒教や、五行思想などを神道の教説の中に取り入れたことは、現代のわれわれの目からみると異なる宗教的伝統の意識的な「習合」であっても、当時は違う形で意識されていたかもしれない。現代のわれわれが、科学的知見をまじえて教義を展開している新宗教教団について、科学と宗教とのシンクレチズムがそこにみられるとは決して言わないように、シンクレチズムという概念は「宗教」という同一のカテゴリーに属しているところの異なる宗教的伝統が融合している場合に用いられる概念である。したがって教派神道の思想を本書のようにネオ・シンクレチズムと捉えることは、すでに儒教や五行思想を、神道と同一の「宗教」というカテゴリーに属するものとして捉えていることを意味する。ネオ・シンクレチズムという概念自体は重要でもあり、有効だとも思うが、それを使用することで当時の宗教的、思想的状況を、一定のカテゴリーによって再構成しているわけだから、そのカテゴライズが妥当かどうか、という議論はしていかなければならないだろう。井上氏は儒教を大幅に取り入れた新田邦光について「純粋な神道の確立という意図は希薄であった」(p.358)と述べているが、それは井上氏の念頭にあったカテゴリーに基づいた判断であって、新田自身はまた別のカテゴリーをもっていたかもしれない。彼は純粋な神道の確立を「意図」していたかもしれないのである。ネオ・シンクレチズムという概念は、当事者が意識的にシンクレティックな宗教をめざした場合に使う概念であるから、なおさらこのことは問題にしなければならないであろう。

最後になるが、本書はいかにも宗教学者による研究という雰囲気をもっているような気がする。理論的枠組みに先導されずに、宗教に関する資料をていねいに処理し、そこから緻密に議論を組み立てていく著者の態度がそのように思わせるのかもしれない。